

近年、日本でも非認知的な能力がクローズアップされている。IQや学力テストには表れないすべての能力、なかでも集中力や自制心、やり遂げる力、モチベーションなどが注目を集めている。

一方、経済的に恵まれない家庭に育ちながら学力が高い子どもが一定数おり、彼らの多くはある非認知的スキル、すなわち高い協働性を有していることもわかってきた。力を合わせて物事に取り組むことを楽しみ、称賛された経験がある。他者の意見を尊重し、自分の意見と折り合いをつけるなどである。

最近の調査では、生徒同士での「学び合い」の授業を一定時間取り入れている学校の子どもの学習能力が高いという結果もある。子どもは先生の話よりも友達の成功や失敗から多くを学ぶものである。

ある統計がある。学力テストの結果を最も左右するのは、家に50冊、100冊と多くの本があることで、25%もの差が出る。二番目は読み聞かせの習慣の有無で18%、興味深いのは三番目で、博物館や美術館に連れていく習慣があることで17%を示している。これは毎日朝食をとることの10%を大きく上回っている。これらは、好奇心を誘う環境にあれば子どもは勝手に学んでいくことを物語っている。

協働性とコミュニケーション能力には関係性がある。最近の子どもはコミュニケーション能力が低いと言われる。果たしてそうだろうか。科学的な根拠はあるのだろうか。自分が子どもだった頃の昔もコミュニケーション能力は低かったように思う。むしろ今のほうが昔よりも高いということはないだろうか。昔との違いは、兄弟の数や近所付き合い、地域の育成会などが減るなど、その力を発揮する機会に恵まれていないことである。

大人や初対面の人、海外の人などに対して、いかにコミュニケーション能力を発揮できるか。相手を意識することが重要であるが、実は、このことは日本人が苦手とするところである。人前で話すことが多い教員とはいえ同じ日本人である。ゆえに相手意識が弱い。教員の意識のどこかに「伝わるだろう」という甘い考えがあるように思える。話したからといって伝わる保障はない。思いの外、伝わらないことが多い。

これから日本には、ますます外国人が入り、日本人もさらに海外に出るようになる。日本人同士でも価値観は多様化している。そうした中で意思疎通を図るには、コミュニケーションの質を変えていく必要がある。

本校の重点事項に「コミュニケーション能力の向上を図る」ことが入っている。社会に出るための就職試験だけでなく、実際に社会に出て活躍するようになってからもコミュニケーション能力は不可欠なものとなる。コミュニケーション能力を向上させることで離職しなくて済むケースも出てくるかもしれない。本校の課題も、現代の子どもたちと同様、その力を発揮する機会を確保することにある。場数を踏むことは重要である。授業や各種行事での場はもちろんのこと、地域を中心として、外に出て行く機会が求められる。

コミュニケーション能力を向上させながら、非認知能力の一つである「やり遂げる力」をぜひ身につけさせたい。この力は、社会に出てから大いに役立つはずである。